様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月　８ 日現在

機関番号：１０１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｋ００８２６

研究課題名（和文）「アイヌ史」の時代区分に関する基礎的研究

研究課題名（英文）A basic study on the chronological divisions of 'Ainu history'.

研究代表者
蓑島　栄紀（MINOSHIMA, Hideki）

北海道大学・アイヌ・先住民研究センター・准教授

研究者番号：７０３３７１０３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、現在、アイヌ史の時代区分において通説となっている、13世紀頃を「アイヌ文化の成立」とし、13世紀頃から近世までを「アイヌ文化期」とする時代区分が、いつごろ、どのように成立したのかを、文献調査や研究者へのインタビューによって学史的に明らかにした。その結果、「アイヌ文化期」という概念は、1950年代に、河野広道などの研究者によって使用されはじめ、普及したことを明らかにした。また、「アイヌ文化期」という概念には、しばしばアイヌ文化を本質的に「原始的」とみなし、アイヌの歴史を「原始文化の残存」としてとらえる認識が付きまとっていたことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　これまでアイヌ史は、主として和人研究者の手によって、客体的に取り扱われてきたが、今日では、「先住民族としての立場に立脚した主体的なアイヌ史」の構築が求められている。その意味で、これまで通説化していた「アイヌ文化期」という概念が、どのような時代的・社会的文脈のもとで形成されてきたのかを明らかにする本研究は、既存のアイヌ史を相対化するための基礎的作業として重要である。また本研究は、「アイヌ文化期」概念が誤解・曲解され、アイヌ民族に対する歴史修正主義的言説の根拠とされるという昨今の社会状況に対抗するうえでも、重要な社会的意義を担うといえる。

研究成果の概要（英文）：In this study, we conducted a literature survey and interviews with researchers in order to determine when and how the current common theory of the period classification of Ainu history, in which the 13th century is regarded as the 'establishment of Ainu culture' and the period from the 13th century to the early modern period as the 'Ainu cultural period', was established. As a result, it was revealed that the concept of the 'Ainu cultural period' began to be used and spread by researchers such as Hiromichi Kono in the 1950s. It also revealed that the concept of the 'Ainu cultural period' was often accompanied by a perception of Ainu culture as essentially 'primitive' and Ainu history as a 'remnant of primitive culture'.

Translated with DeepL.com (free version)

研究分野：歴史学

キーワード：アイヌ史　時代区分　先住民族　北方史　北海道史　北海道考古学　歴史認識　近現代の学知と社会

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

一般に、北海道の歴史年表では、日本史における本州中心の年表とは異なる時代区分がなされ、とくに 13 世紀頃から近世にかけての時代を「アイヌ文化」「アイヌ文化期」と呼ぶことが特色である。こうした時代区分は、主に北海道考古学の成果を基礎に構築され、通説として普及するに至っている。ただし、この時代区分については、以前からさまざまな批判がある。

この時代区分は、見る者に、アイヌ文化、アイヌ民族が 13 世紀に突如として現れたという印象を抱かせる。文化や民族は不変のものではなく、13 世紀以後を「アイヌ文化期」とする時代区分には、本質主義的なアイヌ観を回避する意義もあることは理解できる。しかし、「アイヌ文化期」とは、あくまでも遺構・遺物など、物質的な特徴から定義された「考古学上の」区分である。具体的には、「アイヌ文化期」は、北海道で土器や竪穴住居が使用されなくなり、代わりに木製品や平地住居が普及し、輸入した鉄鍋や漆器を多く用いる生活に移行した時代を指している。

ここでは、道具で区分された時代区分のなかに、「アイヌ」という民族集団名を冠した時代区分が混在することになる。特定の期間を呼ぶのに「アイヌ」という民族集団名をあてるために、土器製作の終焉を指標とする「アイヌ文化期」が、人間集団としての「アイヌ」の時代だという誤解に往々にしてつながっている。またこのことが曲解され、アイヌ民族の存在を否定するヘイトスピーチに利用されるなど、多くの弊害をもたらしている。

翻ってみれば、「民族史としてのアイヌ史」の一段階に、土器を使用する段階があったとしても、本来、何ら問題はないはずである。「日本史」において、どの時点からが「日本人」「日本文化」なのかという定義が厳密に問われることは、基本的には生じない（国民国家論をめぐる多くの議論があるとはいえ）。それは、日本の歴史研究や歴史教育が、近代に誕生した国民国家としての「日本」を基準に組み立てられてきたからにほかならない。一方で、アイヌ民族に関しては、その「成立」と、歴史的な「定義」が過剰に問題とされる状況が続いている。ここには、「アイヌ史」と「日本史」のあいだの明瞭な不均衡、非対称性をみてとることができる。

2007 年に国連総会で採択された「先住民族の権利に関する国際連合宣言」にみるように、今日、「先住民族」は、国家と対等の自己決定権を有する主体として位置付けられ、現在進行形で、近代的な“ nation ”として構成されつつある。とすれば、北海道を中心として展開してきた人びとの歴史を、国民国家の歴史である「日本史」と対等に、「先住民族史」としての「アイヌ民族の歴史」ととらえることには、十分な必然性・合理性があるといえる。

２．研究の目的

本研究は、「先住民族史としてのアイヌ史」の前提となる枠組みの構築を目指しておこなわれる。従来のアイヌ史研究における、理論と実証両面の手厚い蓄積・達成を踏まえつつ、「アイヌ史」の時代区分をめぐる学説史をつぶさに整理・検討し、その成果と課題を明らかにする。そのうえで、「先住民族史としてのアイヌ史」にふさわしい、独自の時代区分のモデルを提出する。

３．研究の方法

本研究では、「アイヌ史の時代区分」にかかわる研究史的な文献の網羅的な収集と整理、分析をおこない、これに関する議論の変遷を学史的に詳らかにし、それらの成果を正しく位置づけるとともに、そこに内在する問題点、時代的制約など、課題の抽出を進める。文献資料による研究史調査を補うものとして、これまでアイヌ史研究を牽引してきたベテラン研究者への学史的なインタビューをおこなう。

アイヌ史の時代区分に関しては、過去にもいくつかのオリジナリティに富む提言があるが、それらは十分な検証を経ないまま、その後の研究に継承されておらず、再評価の余地がある。これらの過去の学説がどのような文脈で提出されたのかを学史的側面から明らかにし、今日の研究水準からの再検討を加え、今後のアイヌ史研究に接続する可能性を探る。

近年の新しい動向も注目される。①瀬川拓郎 2007 は、アイヌ史における対外交易への傾斜を重視し、10 世紀の「アイヌ・エコシステム」への転換が、13 世紀の土器の終焉より重大な転換であったとする。そして従来の「アイヌ文化期」を「ニブタニ文化期」と改称し、より長期的な「アイヌ史」の一部に位置づける（『アイヌの歴史』）。また、②特定の時代名を設定せず、例えば「8 世紀のアイヌ文化」、「17 世紀のアイヌ文化」などと西暦で示す見解がある。2020 年に北海道白老町でオープンした国立アイヌ民族博物館では、「アイヌ文化期」の用語を使用せず。北海道島の人類史を通史的に「私たちの歴史＝アイヌ史」として位置付けている。さらに、③「アイヌ史」に「古代・中世・近世」等を設定する見解もある。蓑島 2014（「古代北海道地域論」『岩波講座日本歴史 20』は続縄文後半期（3～7 世紀）から擦文文化（7～12 世紀）までの期間を「アイヌ史における古代」ととらえようとする）。同様に、谷本 2015（「近世の蝦夷」『岩波講座日本歴史』13 は「アイヌ史的中世」「アイヌ史的近世」に関する見解を公表している）。これら近年の学説を仔細に検証し、その長所と短所、成果と課題を明らかにする。こうした現状認識のもとに、本研究では、文献史料、考古資料および先行学説を検証し、アイヌ史の時代区分の指標となる項

目を抽出して、新たな時代区分（案）を構想する。

４．研究成果

本研究では、北海道考古学において重要な概念となっている「アイヌ文化期」という用語の、登場前後および展開過程にかけての基本文献を収集し、学史研究の視点から分析して、「アイヌ文化期」という概念が、どのような背景のもとに、どのような文脈でもちいられ、どのような学界・社会への影響を及ぼしたかについて考察した。

上記の研究によって、およそ以下のことが明らかとなった。今日、一般的な通念とみなされがちな、おもに土器の終焉以後を指す「アイヌ文化期」という概念は、河野広道に代表される戦前の北海道史研究では使われていない。この概念は、戦後、とくに 1950 年代に使用されはじめ、普及した。1950 年代に、今日の北海道考古学の時代区分の基盤を構築した大場利夫は、「アイヌ文化期」とそれ以前の歴史の断絶を強調せず、むしろ両者の連続面を重視している。ただし、当時の研究は、アイヌ文化の「真髄」「本質」を「先史時代の残存」とし、それ以後のアイヌ民族の歴史を正当に位置づけないという重大な問題性を含んでいる。

こうした学史的検討を踏まえたうえで、今日の「アイヌ史」に必要とされる課題も明らかとなった。すなわち現代においては、アイヌ民族の存在を過去に固着するかのような、アイヌ文化の本質を「先史時代の残存」とみなす歴史認識を払拭したうえで、アイヌ史における過去から現在への連続面を改めて正当に位置づける作業が必要である。

また、本研究では、歴史学、考古学、アイヌ文化研究をそれぞれ専門とする 5 人の研究者から、およそ 1970～90 年代にかけての研究状況や、当時の問題意識、現在の研究状況に関する所感等を聴き取ることができた。これにより、文字記録の遺漏を補い、当時の学界・社会の空気感をつかみ、より深く学史に迫る手がかりを得た。こうした取り組みは、「アイヌ史の時代区分」に関するこれまでの研究の成果・達成とともに、その問題点や時代的制約など、課題の抽出を進めるのにきわめて有益であった。

反省点として、本研究が当初の目的としていた「アイヌ史の時代区分」（案）の具体的な提示には必ずしも至らなかった。ただし本研究の成果を生かした社会的実践として、国立アイヌ民族博物館第 7 回特別展示「考古学と歴史学からみるアイヌ史展―19 世紀までの軌跡―」（2023 年 9 月 16 日-11 月 19 日）の企画に関わり、また展示コンセプトおよび展示内容の成果と課題について意見交換をおこなうことができた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計8件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 蓑島栄紀	４．巻 782
２．論文標題 考古アカデミックレポート：「アイヌ史」の時代区分に関する基礎的研究	５．発行年 2023年
３．雑誌名 考古学ジャーナル	６．最初と最後の頁 131-134
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 鈴木建治	４．巻 第６０輯
２．論文標題 アイヌ文化期	５．発行年 2024年
３．雑誌名 北海道考古学	６．最初と最後の頁 87-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 蓑島栄紀	４．巻 131編4号
２．論文標題 書評：熊谷公男『秋田城と元慶の乱』（高志書院、2021）	５．発行年 2022年
３．雑誌名 史学雑誌	６．最初と最後の頁 51-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 蓑島栄紀	４．巻 4
２．論文標題 余録：口承文学とアイヌ史研究	５．発行年 2023年
３．雑誌名 北海道史への扉	６．最初と最後の頁 26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 谷本晃久	４．巻 10
２．論文標題 私の研究：北海道で進める日本近世史研究――アイヌ史あるいは先住民族史との対話の試み	５．発行年 2022年
３．雑誌名 山川歴史PRESS	６．最初と最後の頁 21-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 蓑島栄紀	４．巻 232
２．論文標題 古代北方交流史における秋田城の機能と意義の再検討	５．発行年 2022年
３．雑誌名 国立歴史民俗博物館研究報告	６．最初と最後の頁 113-145
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 蓑島栄紀	４．巻 1013
２．論文標題 アイヌ史研究の現在―交流史といくつかの論点―	５．発行年 2021年
３．雑誌名 歴史学研究	６．最初と最後の頁 18-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 谷本晃久	４．巻 122
２．論文標題 時代区分論から考える「中・近世」の「北日本」	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Arctic Circle（北海道立北方民族博物館友の会・季刊誌）	６．最初と最後の頁 4-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計14件（うち招待講演　12件／うち国際学会　6件）

1．発表者名 蓑島栄紀
2．発表標題 北海道から出土した墨書・刻書土器
3．学会等名 国際学術研究会「東アジアからみた出土文字史料・墨書土器」（明治大学）、2023年8月26日（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2023年

1．発表者名 蓑島栄紀
2．発表標題 「「アイヌ文化期」をどう捉え、どう伝えるか」へのコメント
3．学会等名 令和5年度プンカラ研修会（国立アイヌ民族博物館）、2023年11月12日（招待講演）
4．発表年 2023年

1．発表者名 蓑島栄紀
2．発表標題 北方史・アイヌ史から問う〈日本〉
3．学会等名 SGU10周年記念シンポジウム「〈日本〉史をひらく/Opening up “Japanese” history」（早稲田大学）、2023年12月10日（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2023年

1．発表者名 Jun Takakura, Kenji Suzuki, Shino Yabushita, Shuzou Muramoto, Fumito Akai, Yuichi Nakazawa, Masaki Naganuma, Yasushi Terasaki, Yorinao Shitaoka, Tsutomu Soda,
2．発表標題 Obsidian lithic artefacts from the Nishitomi site and their implications for the behaviours of microblade-making foragers in the late Upper Palaeolithic of southwestern Hokkaido,
3．学会等名 4th International Obsiian conference at Engaru,2023年7月6日（国際学会）
4．発表年 2023年

１．発表者名 谷本晃久
２．発表標題 「アイヌ史の時代」をどう捉えるか～その広がりと連なりから考える～
３．学会等名 国立アイヌ民族博物館 第7回特別展示「考古学と歴史学からみるアイヌ 史展－19世紀までの軌跡－」開会記念講演会、2023年9月16日、於：国立アイヌ民族博物館〔北海道白老町〕（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 谷本晃久
２．発表標題 「蝦夷通詞」と学知と：近世・近代移行期から「アイヌ教育史」を 考える
３．学会等名 教育史学会第67回大会シンポジウム「アイヌ教育史研究の現在：研究 の有効性を不断に問う」、2023年9月24日、於：北海道大学〔札幌市〕（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 谷本晃久
２．発表標題 北の東西交流と千島アイヌの世界
３．学会等名 アルザス欧州日本学研究所（ CEEJA）主催シンポジウム「近世日本列島北部地域の光と影」、2023年12月16日、 於：アルザス欧州日本学研究所〔フランス・コルマール市〕（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 谷本晃久
２．発表標題 北海道「開拓」の光と影～アイヌ民族にとっての近代～
３．学会等名 アル ザス欧州日本学研究所（CEEJA）主催シンポジウム「近世日本列島北部地域の光 と影」、2023年12月17日、於：アルザス欧州日本学研究所〔フランス・コルマール市〕（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 蓑島栄紀
２．発表標題 エミシの宗教と南北交流
３．学会等名 令和四年度国史学会大会第一部会日本古代史（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 谷本晃久
２．発表標題 北の東西交流のはじまり―ラクスマン父子と大黒屋光太夫との出会いの世界史的意義―」
３．学会等名 在フィンランド日本国大使館、フィンランド国立公文書館、北海道大学主催「ラクスマン大黒屋セミナー：日フィン友好年2022関連事業」（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 谷本晃久
２．発表標題 記述されるアイヌの文物―近世の文献資料から考える―
３．学会等名 国立アイヌ民族博物館第5回特別展示シンポジウム「アイヌ資料をコレクションすることを考える」国立アイヌ民族博物館（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 鈴木建治
２．発表標題 アイヌ資料とはなにか
３．学会等名 国立アイヌ民族博物館第5回特別展示シンポジウム「アイヌ資料をコレクションすることを考える」国立アイヌ民族博物館（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 蓑島栄紀
２．発表標題 魏晋期の「粛慎」「ユウ婁」と倭・日本
３．学会等名 仙台古代史懇話会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 蓑島栄紀
２．発表標題 『アイヌ文化期』概念をめぐる研究史的検討
３．学会等名 北海道大学アイヌ・先住民研究センター2021年度公開講座
４．発表年 2021年

〔図書〕　計11件

１．著者名 高瀬克範編	４．発行年 2023年
２．出版社 雄山閣	５．総ページ数 151
３．書名 『季刊考古学・別冊42　北海道考古学の最前線―今世紀における進展―』2023年6月（蓑島栄紀「アイヌ史の時代区分」146-150頁を分担執筆）	

１．著者名 田中聡／斎藤秀喜／山下久夫／星優也編	４．発行年 2024年
２．出版社 有志舎	５．総ページ数 423
３．書名 『〈学知史〉から近現代を問い直す』2024年3月（蓑島栄紀「「アイヌ文化期」概念の形成と展開―近代日本の学知と「アイヌ史」―」363-382頁を分担執筆））	

１．著者名 荒木裕行・小野将編	４．発行年 2024年
２．出版社 吉川弘文館	５．総ページ数 206
３．書名 『体制危機の到来：近世後期（日本近世史を見通す）』2024年1月（谷本晃久「第5章：一九世紀の蝦夷地と北方地域」pp.102-125を分担執筆）	

１．著者名 浅倉有子編	４．発行年 2024年
２．出版社 北海道出版企画センター	５．総ページ数 265
３．書名 『漆器からみるアイヌの社会と文化』2024年3月（谷本晃久「 ” アイヌ漆器 ” を用いる和人ー近世蝦夷地在地社会における文化複合の一断面ー 」pp.109-123を分担執筆）	

１．著者名 吉村武彦・川尻秋生・松木武彦編	４．発行年 2022年
２．出版社 KADOKAWA	５．総ページ数 280
３．書名 『陸奥と渡島（シリーズ地域の古代日本）』のうち、蓑島栄紀「古代アイヌ文化論」203-248を分担執筆	

１．著者名 河添房江・皆川雅樹編	４．発行年 2022年
２．出版社 勉誠出版	５．総ページ数 296
３．書名 『「唐物」とは何か―舶載品をめぐる文化形成と交流―』のうち、蓑島栄紀「北方・南方文化と唐物」136-142頁を分担執筆	

1．著者名 歴史学研究会編	4．発行年 2022年
2．出版社 東京大学出版会	5．総ページ数 304
3．書名 『「歴史総合」 をつむぐ：新しい歴史実践へのいざない』のうち、谷本晃久「アイヌの人びとへの「同化」政策」40-47頁を分担執筆	

1．著者名 関根達人ほか編	4．発行年 2022年
2．出版社 吉川弘文館	5．総ページ数 676
3．書名 『アイヌ文化史辞典』のうち、谷本晃久「旭川市旧土人保護地処分法」ほか計23項目を分担執筆	

1．著者名 谷本晃久・小川正人編	4．発行年 2021年
2．出版社 国立歴史民俗博物館	5．総ページ数 218
3．書名 国立歴史民俗博物館編 『学びの歴史像－わたりあう近代－（企画展示図録）』（「第5章 アイヌが描いた未来」（157-178頁）を分担執筆）	

1．著者名 蓑島栄紀	4．発行年 2021年
2．出版社 八木書店	5．総ページ数 488
3．書名 鈴木靖民監修、高久健二・田中史生・浜田久美子編『古代日本対外交流史事典』（「北方史」（240-246頁）を分担執筆）	

１．著者名 鈴木建治	４．発行年 2022年
２．出版社 平凡社	５．総ページ数 288
３．書名 池谷和信編『アイヌのビーズ　美と祈りの二万年』　（「第2章　多様な素材と縄文・続縄文－北海道におけるガラスビーズ 出現前夜の特徴とは何か」（55-68頁）を分担執筆）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	谷本　晃久 (TANIMOTO Akihisa) (20306525)	北海道大学・文学研究院・教授 (10101)	
研究分担者	鈴木　建治 (SUZUKI Kenji) (00580929)	北海道大学・文学研究院・共同研究員 (10101)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関